令和６年３月 29 日

県立厚木北高等学校

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 （２月 16 日実施）	総合評価（３月 22 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	**ハイレベルな文武両道により、高い学力と豊かな人間性を育む。**	①普通科・スポーツ科学科の教育課程に基づき教育の充実を図り、習熟度別学習を有効に活用して学力の向上を図る。 ①豊かなスポーツライフの実現に向けて、日常的にスポーツに親しみ、体力向上、健康増進に取り組む態度を育成する。 ②生徒主体の生徒会活動・行事運営を行う。	①ICT をテーマにした研究授業や教科内研修、授業見学等を実施する。 ①外部教材のさらなる活用と、習熟度別学習の利点を生かすとともに、家庭学習の習慣をつけさせる。 ①運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高める。 ②生徒会本部役員や各委員会委員長などのリーダーシップを支援し、生徒主体の行事運営の機会を増やす。	①研究授業、授業見学等を実施するとともに、生徒の授業評価（年 2 回）に併せて実施したアンケート結果が向上しているか。また、事例を共有できたか。 ①家庭学習が習慣化したか。（外部教材の内部機能） ①知識を深め、技能を高めることで日常生活に生かすことができたか。 ②各種行事に関する生徒アンケートの結果、生徒が行事の企画や運営に意欲的にかかわる姿や場面が前年度より増えたか。	①ICTを使うことをテーマにした研究授業を実施し、各教科でそれに基づいた協議を行った。また、授業見学週間を設け、教科に関わらず全ての教員が他の教員の授業を見る機会を設けた。 ①1学年では定期的に外部教材を活用した家庭学習を実施した。また、補講や補習、授業内においても活用することができた。 ①授業評価時に実施したアンケートでは肯定的な意見が増えた。 ①運動の合理的、計画的な実践については、持久走の授業で運動強度について取り上げ、運動前後で心拍数を測ることなどを通して知識を深めた。 ②体育祭・若楓祭・球技大会の企画運営などで生徒主体の場面が増えた。球技大会は生徒会執行役員が中心となり実施した。（各行事後のアンケートより）	①研究授業だけではなく、授業見学等を行う機会を増やすなどしてさらなる授業改善、研修等を進める。 ①生徒の肯定的な意見を踏まえ、将来の目標を持たせつつ、日々の課題や週末課題や、外部教材の利用等を通してさらに家庭学習の定着を図る。 ①総合的な探究の時間においては、先行研究のデータを示し、知識を深めることを継続する。また ICT の活用実践についても継続する。 ①運動の合理的、計画的な実践については、スポーツ理論の知識を深めるとともに技能を高めることを継続し、スポーツライフマネジメント力を向上させる。 ②安全な行事運営を前提に、アンケート結果を踏まえ生徒に寄り添い、企画立案、運営、振り返りなど、生徒が自主的に取り組む場面を増やし、各行事を活発にしていく。	・学力・競技力の向上や健康教育においての取組が評価できるので、これを進学率や体力評価値などの具体的な数値で表せるとよい。 ・教科指導も諸活動も生徒自らが課題発見と解決に向けた主体的な学びが重要になっている。時代に応じ、先を見据えた学校教育が求められる。 ・他校種も含めた授業参観や研究協議は、発達段階に応じた教科指導の理解につながり、教員のスキルアップにも役立つ。 ・R2年度に4年間の目標を策定した時点では無かった AI の捉え方について、今後の指針に含まれてくるのか。 ・全ての教員が他の教員の授業を見る機会は大変有意義である。 ・大きく変化のある現代において新しい技術に対応していくことは大変かと思うが、積極的に取り組んでいる。	①学力・競技力の向上や健康教育については、具体的評価の経年変化を見ていく必要がある。 ①学習に対する意識が向上してきているが、家庭学習の定着についてはまだまだ課題が残る。 ①研修等を通して、ICT の操作方法は多くの教員が身につけてきている。また、生徒も情報や他教科の授業を通じて、オペレーション方法を身につけている。 ①ICT を活用した授業展開は1・2年生を担当した教員には浸透したが、3年生を担当した教員にはまだ課題が残る。 ①運動の合理的、計画的な実践については、持久走の授業で運動強度について取り上げるなどしているが、他の種目においても、科学的な知識について話していくことで、種目ごとのつながりや科学的な知識の理解を深めることが課題である。 ②感染症対策を継続しながら、生徒主体の学校行事を行うことができた。今後は限られた施設を工夫しながら生徒が活躍できる場面を増やしていく必要がある。	①さらなる学力向上を目指し、各教科で適宜課題を課すなど、家庭学習時間を確保できるような工夫・充実を図る。 ①他校種も含めた授業研究に加えて授業見学等を行う機会を増やし ICT を活用した授業の充実を図る。また、事例を共有する。 ①運動の合理的、計画的な実践については、 種目のコツや技術的な解説の時にワンポイントアドバイスを行うことで、スポーツライフマネジメントを向上させる。 ②行事等については、体育館の耐震工事の影響から前年と同様の運営が難しい状況であるが生徒の主体的な取り組みができるように早めの企画立案を計画的に行う。
2	（幼児・児童・）生徒指導・支援	**部活動や行事に主体的に取り組み、自己肯定感を育むとともに、規律正しい生活を送る校風を維持する。**	①規律正しく、安心安全な学校生活を維持できるよう指導支援する。 ②部活動を通して、生徒の自主性、協調性、人間性を育む。	①交通安全教育を中心に、日常生活におけるルールやマナーの順守について、教員・生徒会本部役員・部活動・外部講師と協力して注意喚起を行う。 ①教育相談コーディネーターを中心に教員・SC・SSW・外部機関と連携した教育相談体制を整える。 ②部活動入部率 65%以上になるよう部活動参加を促す。また、定着率を 80%以上になるように環境を整える。	①交通事故件数を各学年 10 件以下にする。 ①ケース会議の実施、SC，SSWへの相談により、問題解決した事案の件数が昨年度より増えたか。 ②入部率 65%以上を達成できたか。また、定着率が 80%以上を達成できたか。	①1学年 10 件、2学年3件、3学年4件と目標を達成することができた。 ①SC 相談だけでなく、SSW 相談も実施できたことで、各生徒の状況に応じた対応が実施できた。 ①ケース会議の実施や外部機関との連携により、改善傾向が見られる。 ②入部率 59%で、 目標を達成することはできなかった。定着率については 95%だった。	①交通安全については、生徒が主体的に呼びかけることや、警察など外部機関とも連携して対応していく必要がある。来年度は市と連携して自転車ヘルメットインフルエンサー事業モデル校としての活動を着実に実施していく。 ①日頃より生徒情報の共有を丁寧に行い、今後も、サポートドックを活用して早期発見・対応する必要がある。 ②新入生オリエンテーションなどを利用して部活動の意義を生徒に伝えると共に途中入部を促す取組も行う。また、部活動に定着できるような支援を検討する。	・通学中の北高生には思いやりを感じる。ヘルメットを被り、歩行者を守る自転車の乗り方を今後も見せてほしい。 ・今後も命優先の緊張感のある交通安全指導を推進する。 ・来年度のヘルメットインフルエンサー事業に期待する。 ・規律正しい生活の評価として遅刻率や欠席率等の分析をしてもよいのではないか。 ・心のケアには、迅速なサポート体制が重要で、「神奈川子どもサポートドック」や教育相談のさらなる充実に期待する。	①バス会社によるドライブレコーダーの映像を利用した講話、厚木警察署による交通安全講話の実施により注意喚起できた。 ①交通ルールの理解不足や交通事故に対する当事者意識が低い。 ①日頃の生徒との関係つくりに加え、サポートドックの実施により生徒の状況を迅速に把握することができ、早期対応が可能となった。 ①複雑な問題を抱える生徒が増えてきているため、外部機関を含めた連携が必要になっている。 ①規則正しい生活の数値評価について検討していく必要がある。 ②部活動に定着する生徒は 95%であった。今後は入部率の向上が課題である。	①ヘルメットインフルエンサー事業モデル校として、市と連携して取り組む。 ①学年会や職員会議にて生徒情報を共有することや、SC、SSWより生徒支援の具体的な手立ての助言をもらう。また外部機関の紹介などを通して、きめ細かい支援を実施できるようにする。 ②新入生歓迎会だけでなく、他の行事を通じて情報発信し、継続して部活動の意義などを伝えていくことでさらに入部率の向上に繋げ、定着を図る。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	総合評価（３月 22 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等	（２月 16 日実施）	成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	**目標を持ち努力し続けることで一つ上の進路実現を目指す生徒を育てる。**	①時代の変化に応じ、生徒の多様な進路目標へ柔軟に対応する。 ②個々の生徒が希望する進路目標を明確化させ、より充実した生徒の自己実現を支援する。	①学年や希望進路に応じた多様な進路ガイダンスを計画する。 ①個別面談等を通じて進路目標に応じたインターンシップや体験講座、各種模試等の受講を促す。 ②進路希望調査やキャリアパスポート、到達度テストの結果等を活用し進路指導や学習支援に繋げる。	①希望に応じた進路ガイダンスは計画できたか。 ①各種講座の受講者は増えたか。受講によって目標とする進路を明確にできたか。 ①教育職を目指す生徒に小中学校等での教育体験活動を提供できたか。 ②希望調査や学期ごとの生徒の振り返りは有効に活用できたか。	①職業人講話、模擬授業、大学及び専門学校による分野別説明会等の進路ガイダンスを学期の節目ごとに実施した。民間企業と連携した。 ①各種講座を開講した、目標を明確にした。 ①教育体験活動は提供できなかった。 ②進路希望調査を行った。キャリアパスポートや到達度テストの結果を活用した。	①民間企業（日産自動車）の連携は、今後の継続や内容を深めることが課題である。次年度も早めに計画する。 ①各種講座は内容、講師の精査が課題である。外部講師の利用を再検討する。講師謝礼など予算確保を検討する。 ①教育体験活動は準備不足である。引き続き情報収集を行い、業務分担も見直す。 ②各進路目標に向けて、具体的なモチベーションのアップが課題である。探究活動や部活動の成果を進路活動に繋げる。	・進学が必ずしも望ましい進路とは限らない。個々のニーズを把握し、様々な選択肢を与えられる進路指導を期待する。 ・教育職を目指す生徒は是非他校種の教育活動に参加してほしい。 ・複雑な多様社会を豊に生きていける力の育成が必要。 ・探究活動は総合型選抜の主要な入試方式になるので、積極的に高大連携を進めるべきである。	①大学進学率は 47%程度で横ばいである。今後は受験生のニーズに合わせて進学先の質の向上が課題である。また、専門学校や就職など多様な進路希望と大学進学率向上との整合性について議論が必要である。 ①教育職を目指す生徒の小学校派遣について、具体策や企画、指導の時間が乏しい。 ②「総合的な探究の時間」の授業内容について学習支援グループとの連携が不足している。また、総合型選抜等の入試制度の変化に対応する教員の知識、資質、能力が不足している。	①引き続き進路ガイダンスの充実を進める。職業観の育成を通じて進学に対すモチベーションを高める。 ①教育職を目指す生徒を小学校へどう派遣するか検討し実現していく必要がある。 ②キャリアナビプログラムを導入し、「総合的な探究の時間」の学習成果を進路活動につなげる。 ②大学入試制度の変化に関する職員研修を実施する。
4	地域等との協働	**地域の教育力を積極的に活用する。**	①生徒の学習意欲や進路意識を高められるような高大連携教育を推進する。 ②部活動を通して地域とともにある学校づくりを進める。	①高大連携教育の有益性を教員間で共有するとともに、近隣の大学と連携し、生徒が興味を持ちやすいプログラムを考える。 ②関わる部活動の数を増やし、運動部以外の部活も活躍できる連携事業を考える。 ②HPを充実させ、地域に情報を発信する。	①高大連携プログラムに参加する生徒が前年度より増えたか。 ②連携事業にかかわる部活動の数が前年度より増えたか。 ②学校ＨＰの更新頻度が前年度より増したか。	①高大連携プログラム参加生徒数は、昨年度９名、今年度17名と大きく増えた。 ②昨年度に再開した連携事業の「みんなで ワッショイ スポーツだ」を３月に実施するが、昨年度と同じ規模であった。 ②学校HPの新規更新頻度は前年度と同程度だったが、古いページを削除し、内容を充実させた。	①希望者が参加する形だけでなく、授業や学年行事などでの高大連携プログラムの実施を検討することが必要である。 ②体育館の耐震工事の為、施設の確保などが課題である。できる範囲で工夫して部活動と地域の連携事業を実施していく。 ②HP更新にICTサポーターを活用し、中身の充実を進めている。	・防災を通して小中高大地域の連携を形にできたことで、地域の安全・安心なつながりを構築でき、その意義は大きい。 ・公民館主催のスポーツ行事は小学生が高校生に憧れを持ちながらスポーツに取り組める他に例を見ない良い機会である。今後も是非継続したい。 ・秋の地域貢献デーのようにボランティア活動を実践する力は将来にわたり生かされる。	①防災を通した地域連携の形ができたことが大きな成果である。 ①高大連携プログラムの参加者を増やせたことは成果だが、学校全体の生徒数からすると、少ないことが課題である。 ②スポーツを通した小中高の連携行事は、コロナ禍による中断を経ながらも再開できたことは成果と考える。 ②ICT サポーターの取り組みにより HP の内容が整理され、充実させることができた。今後、よりタイムリーな情報更新を進めることが課題である。	①高大連携についてはキャリア教育とも関連づけ、授業や学年行事などで連携するなど、より多くの生徒が関われる方法を探る。 ②スポーツを通した連携事業を参考に、運動部以外の部活動が活躍できる方法を考える。 ②タイムリーな HP 更新ができるようグループ内の役割分担を工夫する。
5	学校管理 学校運営	**①生徒第一に安心安全かつ快適な教育環境整備を進める。 ②風通しの良い職場環境づくりを行い、対応力のある学校運営を目指す。**	①ICT により学校と家庭を連携した学習環境を整える。 ①生徒の防災意識を高める。 ②風通しの良い職場環境づくりを行い、対応力のある学校運営を目指す。	①スクリーン、プロジェクター、Wi-Fi 環境の増設、ICT 利活用に関する研修や事例の収集を行い学校生活に ICT を効率よく活用できるようにする。 ①1 人 1 台 PC の研修や ICT 利活用に関する事例の共有ができたか。 ②Teams を活用して、職員間の連携を緊密にし、施設利用の効率化やペーパレス等につなげる。	①日々の学習や学校生活に ICT を効率よく活用できたか。 ①1 人 1 台 PC の研修や ICT 利活用に関する事例の共有ができたか。 ①DIG や避難訓練により防災への理解を深め、生徒による応急手当など工夫できたか。 ②施設利用やペーパレス等、一つ一つの課題に対応できたか。	①プロジェクタ等 ICT 関連備品を充実させ、学校生活に ICT を効率よく活用できるようになってきている。 ①1 人 1 台 PC の活用、管理に関する導入学年におけるルールを構築することができた。 ①ICT 関連備品の充実を優先させたため、研修や事例の共有ができなかった。 ①生徒による応急手当のレクチャーを全校にすることができた。また神奈川工科大学とも連携し、避難訓練時に講義を受けた。 ①学校運営協議会が主体となり、地域の防災活動に取り組んだ。 ②Teams を活用して、施設利用の効率化やペーパレス等につなげることができた。	①予算に応じて、プロジェクタ等 ICT 関連備品を充実させ、ICT 利活用に関する研修をすることで、学校生活に ICT をさらに効率よく活用できるようにする。 ①1 人 1 台 PC の ICT 活用、管理に関する全学年でのルールを構築する。 ①DIG や避難訓練により防災への理解を深めるため、生徒による応急手当や神奈川工科大学との連携等、今後も工夫する。 ①地域の防災活動の継続・発展は地域と検討していく必要がある。 ②Teams を活用して、職員間の連携を緊密にすることで、施設利用の効率化やペーパレス等をさらに徹底する。	・生徒もＺ世代と言われる時代にあり、ICT の効果的な活用を図る必要がある。 ・生徒が快適な高校生活を送れるようなインフラ整備の充実を期待する。 ・防災を通して小中高大地域の連携を形にできたことで、地域の安全、安心なつながりを構築でき、その意義は大きい。（再掲） ・今後も継続して地域協働に取り組むことを期待する。	①プロジェクタ等 ICT 関連備品が各クラスで活用できるように整備でき、学校生活に ICT を効率よく活用できるようになってきている。WI-FI 環境については全クラスに整備ができた。 ①1 人 1 台 PC の活用、管理に関する導入学年におけるルールを構築することができた。来年度は学校全体での活用ルールを徹底する必要がある。 ①生徒による応急手当のレクチャーを全校にすることができた。また神奈川工科大学とも連携し、避難訓練時に講義を受けた。このような取り組みを継続し、生徒の意識を高めていく必要がある。 ①学校運営協議会が主体となり、地域の防災活動に取り組んだ。さらに内容を充実させていく必要がある。 ②施設利用の効率化やペーパレス等を推進することができた。Teams の活用に関しては、さらに検討が必要である。	①WI-FI については全員でアクセスしても良好につながる理論値になっているが、さらに改善・推進を図る必要がある。 ①1 人 1 台 PC の活用、管理に関する導入が来年で全学年になるので、活用のルールを徹底する。 ①生徒による応急手当のレクチャーなどは自主的・積極的な防災活動への参加につながるので継続していく必要がある。 ①地域の防災活動については発展させていく必要がある。 ①ペーパレスが進んできているので、Teams の活用法を検討し、推進する。